

島になっていく北海道と人々の暮らし

国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

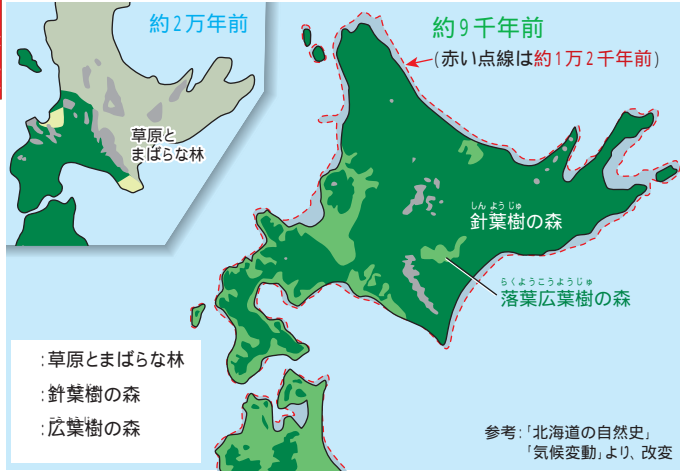
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



最も寒さがきびしかった1万8千年前ころを過ぎると、地球は暖かくなってきていました。ただし、スムーズに暖かくなったわけではなく、何度も寒さがぶり返しました。

暖かくなるにつれ、日高山脈をはじめ、地球上の氷河がとけ出しました。とけた水が海に流れこみ、海面が高くなり、低い土地が海底にすんでいきます。

およそ1万2千年前には、北海道とサハリンが海によって切りはなされ、北海道は島になりました。(p64)

また、暖かくなるにつれ、だんだんと森林が広がっていきました。トドマツやエゾマツの仲間など針葉樹の森です。

約1万2千年前になると、北海道はサハリンと分かれ島になった。暖かくなるにつれ、十勝にも針葉樹(トドマツなど)の森が広がっていた。約9千年前になると、落葉広葉樹(ミズナラなど)の森も広がりはじめた(縄文時代 p84)。



針葉樹の林(東ヌブカウシヌプリ:鹿追町)。ただし、とても若い林。

消えていく「細石刃」

一方では、マンモスやバイソン(野牛: p72)など、北からやって来た大型の動物が減っていきました。

替え刃式の石器「細石刃(p78)」も、それに合わせるようにして作られなくなっていきます。

細石刃は、角などのじくにくにうめこんで使うため、あまり小さなヤリ先が作れません。大型の動物がいなくなり、小さくすばしっこい動物を相手にするためには、使いにくくなったのかも知れません。



細石刃。

つなぎやすいヤリの先「有舌尖頭器」

1万4千年前ころから、「有舌尖頭器」というヤリ先の石器が作られるようになりました。木製の柄につなぐところが細工してあって、石器の下が飛び出した形(突起)になっています。

この突起が「あっかんべエ」をしたときの「舌」のように見えることから、「有舌尖頭器(舌のような突起が有る尖った頭の石器、という意味)」と名づけられています。

また、刃をみがいて(といで)作った「石おの」も使われるようになります。森林が広がったことで、木々を切り開く必要が大きくなったためでしょうか。



石おの(札内N遺跡)。



札内N遺跡(幕別町)で見つかった有舌尖頭器。それぞれの石器の下に飛び出したところ(赤丸の部分など)が「舌」。有舌尖頭器はヤリ先として使われた。(写真:2枚とも幕別町教育委員会蔵)

1 針葉樹(しんようじゆ): 葉が針のように細長いマツやスギなどの樹木のこと。温帯北部から冷帯を中心に分布している。分類としては裸子植物門・球果植物綱に入る。

うつ か きゅうせつ き おおぞら い せき さつないエヌ い せき
移り変わっていく旧石器の文化 ... 大空遺跡から札内N遺跡へ

およそ1万6千年前の「**曉遺跡（帯広市）**」からは、**細石刃核（細石刃をけずり出す前の石器）**は見つかりましたが、**有舌尖頭器**は見つかりませんでした（ p79）。

それよりあとの「**大空遺跡（帯広市）**」からは、**細石刃核**と、**有舌尖頭器**が**いっしょ**に見つかりました。

およそ1万3千年前の「**札内N遺跡（幕別町字依田）**」では、**大小の有舌尖頭器**はありましたが、**細石刃**は見つかりません。

細石刃を使う文化から、**有舌尖頭器**を使う文化へ移る間に、**両方とも使う文化**があったようです。

大空遺跡の旧石器は**帯広百年記念館**で、また**札内N遺跡**の旧石器は**幕別町ふるさと館**で見ることができます。



大空遺跡(帯広市)では、**細石刃核(左)**と**有舌尖頭器(右)**が**いっしょ**に見つかった。
 (写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 2)



大空遺跡(帯広市空港南町南10線・南の森西)と帯広百年記念館(帯広市緑ヶ丘2番地)の位置。



札内N遺跡の位置。幕別町字依田。



幕別町ふるさと館の位置。幕別町字依田384(依田公園横)。

炭や花粉でわかる木の種類 ... 昔の環境を知るために

木の種類によって、寒いところに生えるものもあれば、暖かいところに生えるものもあります。昔生えていた木の種類がわかれば、そのころの気候がわかります。

それでは、昔生えていた木の種類はどうやってわかるのでしょうか。

答えは、たき火のあとと花粉の化石です。

木もふくめて、ほとんどの生き物は死ぬとくさって(分解されて)土にかえります。

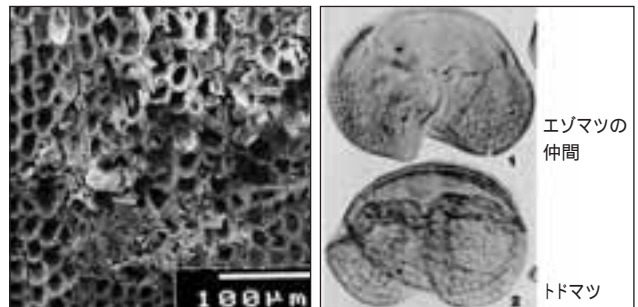
ところが、たき火に使われて炭になったものは、くさらずに残ります。およそ2万年以上前の**若葉の森遺跡**や**南町2遺跡（帯広市）**からは、**ハイマツ**（ p62）や**グイマツ**、**トドマツの仲間**や**エゾマツの仲間**の炭が見つかりため、このころがとても寒かったことがわかります。

また、多くの花粉は、中身がくさっても外側の膜がとてもくさりにくいで、長い間（数千万年も）残り化石となります。この膜の形を調べることで、どんな種類の植物が

生えていたかがわかります。(化石 p21)

とくにしめったところでは、ものがくさりにくくなります。そこで、**湿原の土**である**泥炭**に長いつつをねじこんで、土ごとそのつつをひきあげる「**ボーリング調査**」をすると、上から新しい順番に昔の花粉を見つけることができます。

それによって、その湿原周辺の昔の自然環境が、順々にわかっていくのです。



若葉の森遺跡(帯広市)で見つかったエゾマツ類の炭。(3)
 曉遺跡(帯広市)で見つかった花粉。(350倍)

(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんがいせいせんたー）：帯広市西23条南4丁目26-8 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

3 μm（マイクロメートル）：長さの単位で、1mmの千分の1。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

ひとつの遺跡にある長い歴史 ... 川西C遺跡の場合



川西C遺跡の位置。帯広市西15条南40丁目。

川西C遺跡は、帯広市西15条南40丁目、稲田小学校の周りにある遺跡です。

この場所は、およそ4万5千年前から札内川がけずり残していった段丘の上です（p54）。すぐ北側では、八千代（帯広市）から流れてきた売買川が段丘の角をけずり落とすように流れ落ち、札内川に向かっていきます。

この遺跡では、76ページにあるように、およそ2万1千年前の石器や顔料のもとなどが見つかっています。旧石器時代のキャンプ生活の中でも、どちらかというくと長くどまって、狩りの準備などをする「ベースキャンプ」だったと考えられています。（/）



川西C遺跡の発掘調査。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：1）

しかし、ここを人が利用したのは、その時だけではありません。

およそ1万3千年前、まだ氷期（p52）ではありますが少しづつ暖かくなってきたころ、ここに再び人がやって来て石器を作り、たき火をしていました。

続いて、およそ8千年前、今とほとんど同じ暖かさになったころ、今度は石器を使う人々がここで暮らしていました。すでに縄文の文化（p84）になってい

ました。縄文時代のものとしては、ほかにおよそ6千5百

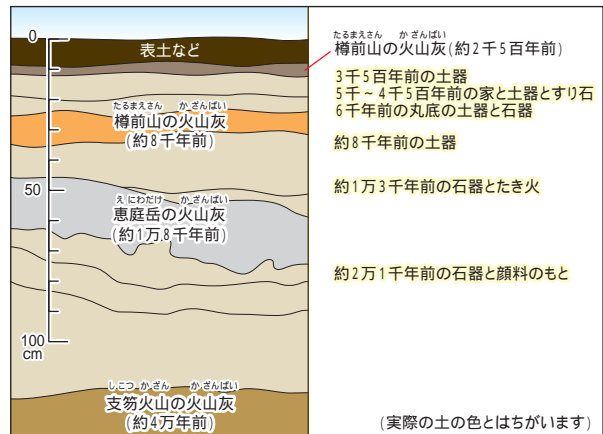


川西C遺跡に人がいたことがわかっている時。くり返し人がやってきている。

年前の土器が大量に見つかり、さらに6千年前の丸底の土器と石器、5千~4千5百年前の小さな住居あとと土器やすり石、3千5百年前の土器が見つかります。最も古い時からすでに1万7千年（以上）たっていたころです。さらに、共栄通をはさんで西側にも「稲田1遺跡」があり、ここでも旧石器時代と縄文時代の遺跡が見つかっています（p92）。

いい方を変えれば、稲田小学校のあたりは、1万7千年の時をこえて、たびたび人がやって来ていた場所なのです。川西C遺跡だけでなく、多くの遺跡が同じようにたびたび使われています。

ただし、ずっと絶え間なく人がいたわけではありません。ある時期人がいなくなって、数百年たってから、別の文化を持った集団がやって来る、ということがくり返されているのです。



川西C遺跡の地層イメージと見つかったものの年代。

それよりあとはどうでしょうか。縄文時代に続く縄文時代（p100）や擦文時代（p102）、開拓期のアイヌ文化期においては、狩りや植物採集などをするための生活空間（イオル p150）として利用されたでしょうし、あるいは集落がつけられたことがあったかも知れませんが、その遺跡は残っていません。

それではおよそ3千5百年前を最後に、人が住みついていた証拠はないのでしょうか？ いえいえ、その3千5百年後、また多くの人々がもっと広い範囲に広がって住みついています。たくさんの方が集まる巨大な建物

も建てられました。そう、今の住宅地と稲田小学校です。

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

1 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

十勝縄文の始まり？ それとも... 大正3遺跡



発掘中の大正3遺跡。ここを流れていた川が、流れにそってつくった「もり上がり(自然堤防：2)」の上にあった。今は自動車道の下。

発掘調査の時、土器のかけらが、ふつう縄文のものが
出る地層より下の地層から見つかりました。
調査をしていた山原学芸員(帯広百年記念館埋蔵文化財センター)は、これを見ると、
「この文様(もよう)は、新潟県の小瀬ヶ沢洞窟遺跡
のものに似ている」と思ったそうです。小瀬ヶ沢の土器は、縄文時代の始まりころ(草創期)のものでした。

この土器のかけらには、ほかにも表面をつめや道具でさしたりつまんだりしてつけたもようがあるなど、縄文時代初めの特ちょうを持った土器であることが確かめられました。



大正3遺跡で見つかった石器。左上がヤジリ(矢の先)。左下内はその後の縄文時代のヤジリ。



(上)自動車道完成後。

(右)大正3遺跡の位置。帯広市大正町東3線。

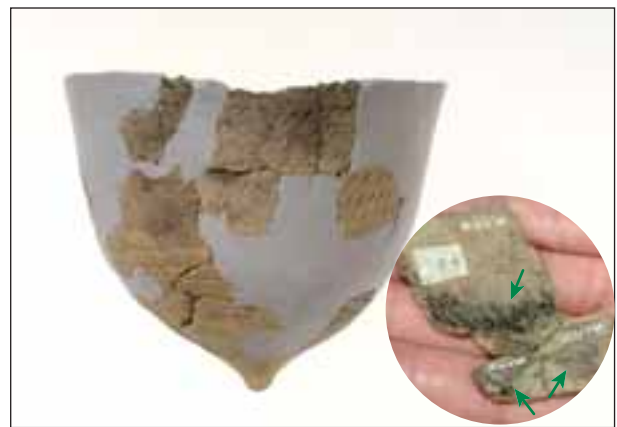


「土器」は、粘土を形にし火で焼いて作る器です。土器が現れることで、「縄文の文化」が始まります。

本州では、およそ1万3千年前の土器が見つかっていて、ここから「縄文時代」が始まるとされていますが、北海道ではずっとおくらせて、9千年前ころから土器が使われだしたと考えられていました。

しかし、平成15年(2004)帯広・広尾自動車道の工事前に発掘調査された「大正3遺跡(帯広市大正町)」から、およそ1万2千年前の土器が見つかりました。

まさに、北海道の歴史を書きかえる、大発見だったのです。



復元された土器。円内は土器についていた「おこげ」(矢印)。

さらに、見つかった土器は料理に使われたようで、「おこげ」がついていました。おこげにある「炭素」を調べることで、いつの時代のものかわかります。

その結果、「おこげ」は1万2千年くらい前のものだったことがわかったのです。(p70)

こうして、大正3遺跡から見つかった土器は、北海道最古のもので、本州で縄文時代が始まってまもなくのものであると確かめられました。

ただ、これが十勝(そして北海道)の縄文時代の始まりだとすると、なぞも残ります。

このあと、約3千年の間、土器が見つかっていないこと。3千年後の縄文の土器や石器と、ちがいが大きいこと。ヤジリ(矢の先)の石器も見つかるが、本州のもの(▲)とちがって、◆形であること、など、わからないことが多いです。

一度、暖かくなった時に、土器を持った人たちが北海道にわたってきたのだけれど、およそ1万2千年前にあった「寒のもどり(寒さがもどった時期)」に、いなくなったのかも知れません。

(写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

2. 自然堤防(しぜんていぼう)：自然のままの川にそってできるより少し高い土地。洪水が起きた時、あふれた川の水が土砂を堆積(たいせき：積み重ねること)していくことできる。 1 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねん

かんまいぞうぶんかざいセンター)：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん